建部巣兆のやまと絵系作品について
― 《花山天皇出家図》を中心に ―

加藤ゆずか（早稲田大学）

江戸時代後期の文人、建部巣兆（1761-1814）は、江戸で春秋庵を結んだ加舎白雄の門に入り、蕉風俳諧の顕彰と普及につとめた俳人として、夏目成美、鈴木道彦と共に江戸の三大家と称された。また絵師としても活動した巣兆は、略筆による俳画を頻繁に描く一方で、自らを「倭絵師」と称し、やまと絵系の作品も残している。

巣兆の俳諧・俳画は、文学および俳諧史上で豊かな先行研究がみられるが、巣兆のやまと絵系の作品に関しては研究の余地を残している。そこで本発表では、現存作例の検討を中心に巣兆のやまと絵系作品の描き方、題材、作品の享受層について考察を行う。

巣兆は、細密な線描と豊かな彩色によるものは勿論、必ずしもそれにあたらない画風であっても、やまと絵の伝統を踏襲したものや古典文学に取材したものは「倭絵師」として描いたとみられる。その意識は、楷書の落款様式や、巣兆「松甫」印が真っ直ぐに捺されるところから窺える。ただしその出典は、従来のやまと絵には頻出しないものも含まれ、加藤千蔭賛による《花山天皇出家図》（足立区立郷土博物館蔵）は、その一例である。

築地塀に咲く撫子を背景に、貴人を乗せた牛車の一行が描かれる本作は、各モチーフの考証より、花山天皇の出家譚を元とした画賛であることが判明する。花山天皇の出家譚は複数の出典が存在するが、出家後の花山院が自邸の築地塀に撫子を植えさせる逸話は『大鏡』九十三段「花山院の御製秀逸　意匠の巧妙さ」のみにみられる。花山院は『拾遺和歌集』の撰者とされるなど、和歌に造詣が深い人物とみなされる点や、巣兆・千蔭の他作例も和歌の歌枕を題材とする点より、本作も和歌の愛好者に向けた題材と考えられるが、花山院および『大鏡』は、従来のやまと絵で描かれることは少ない。この点に関しては、巣兆の対人関係や、やまと絵の学習環境といった巣兆個人の要因と共に、その作品の享受層を含めて考察する必要がある。

巣兆のやまと絵系作品は、巣兆が拠点とした千住・足立の有力商人や大農家などの名士層に好まれたことが、先行研究や千住・足立の旧家に伝わる作例より窺える。千住・足立の名士たちは、巣兆率いる俳諧連の千住連を構成し、また地域の狂歌師として江戸の狂歌人名録に掲載される人物も確認できる。彼らは巣兆と共に江戸下谷の文人と親交を深め、俳諧・和歌・狂歌・漢詩・書画など豊かな文芸を受け入れる土壌を形成していた。《花山天皇出家図》等、幅広い古典に取材した巣兆のやまと絵系の作品は、巣兆が拠点とした豊かな文芸に裏打ちされた地域の文化社会の中で好まれ、受け入れられた可能性が考えられる。

巣兆のやまと絵系作品は、従来のやまと絵の享受層である宮廷や幕府と異なる対象が想定される点より、近世後期の復古やまと絵を考える上で重要視されるだろう。